



Collection

貴重書・コレクション紹介

Collection no.3



名古屋図書館

近代の漢訳聖書コレクション

『新遣詔書』 名図事務193.5:X99(全8巻)

『神天聖書』 名図事務193:Sh69(全21巻)等

近世から近代の中国では、数多の欧米人宣教師によって聖書の漢訳が試みられてきました。19世紀初頭にはプロテスタントによる漢訳活動が始まり、その最初期には、いずれもイギリス人の宣教師であるロバート・モリソンとジョシュア・マーシュマンが活躍しました。それ以前の18世紀初頭には、カトリックの代表的な漢訳であるフランス人宣教師バセの所謂『四史攷編』があり、そのバセの稿本をモリソンが大英図書館で筆写し、これを携帯して中国に渡って手掛けたのが、『神天聖書』と総称される一連の漢訳聖書です。また、モリソンと同時期には、中国から遠くはなれたインドでもマーシュマンによる漢訳が行われました。本学図書館では、モリソンの初期の漢訳である『新遣詔書』(1815)と完成版の『神天聖書』(1823)の二つ、そしてマーシュマンの『聖經』(1815-1822)を所蔵していますが、いずれも元々は英国聖書協会が所蔵していたのが、縁あって愛知大学の図書館にやって来たものです。特にモリソンの漢訳聖書はのちの幾つかの後継訳を経て明治期の日本語訳へとつながる系譜の源流としても重要な資料であると言えます。このほかにも、ブリッジマンとカルバートソンによる文言訳やロシア正教会訳など非常に重要なものも所蔵しています。漢訳聖書は、欧人宣教師たちが様々な時代と地点(各官話や方言)で学んだ中国語を反映する資料であると同時に、西洋の文化や概念からの異文化翻訳の資料としての可能性をもっています。本コレクションも研究者をはじめ、多くのかたに利用されることを願っています。

Collection no.4



豊橋図書館

A Dictionary of the Chinese Language

豊図書館 823:Mo78

1804年、ロンドン伝道会がロバート・モリソンを中国に派遣する際命じたことは、中国語の習得と『聖書』翻訳でした。当時、中国では外国人が中国語を学ぶことも、また中国人が外国人に中国語を教えることも禁じていました。そのような過酷な環境の中でモリソンはまずマカオに達し、そこを拠点に聖書翻訳、中国語辞典の編纂、中国語文法書の執筆を開始しました。そのうちの中国語辞典の正式の名称は、*A Dictionary of the Chinese Language*で、全3部からなります。第1部は当時最大規模の辞典『康熙字典』(1716)をその部首別に翻訳、増補したもので、1815年に第1部 第1巻が完成、第2巻は22年、第3巻は23年にずれこみました。『康熙字典』は今でこそピンイン順の索引もありますが、これを外国人が引くのは至難の技でした。第2部は『五車韻府』と呼ばれ、第1部をアルファベット順に並べ替えたもので、1819年に第1巻、20年に第2巻が完成しています。この部分はその後何度も単独で出ています。第3部は英華(本学蔵は2分冊に製本)で、この部分は第2部に続いて出ています。出版の順序は西洋人がこの辞書を利用する際の必要度に応じたものでありました。モリソンの辞書は後の英華・華英辞典のモデルになったばかりでなく、幕末日本にも舶載されました。モリソンの辞書は漢字の語釈に留まらず、西洋人にとっての中国文化百科辞典でもありました。たとえば、「学」は『康熙字典』では数行しかありませんが、本書では40頁にもわたり、中国における私塾、読書の心得、官吏登用制度である「科挙」を事細かに記述しています。本書は中国の図書館では稀覯に属しますが、日本には本学を含め完全なものが国立国会図書館、静岡県立中央図書館、東洋文庫、東京学芸大学、早稲田大学、京都外国語大学、同志社大学等に約10セット存在します。近年、日本と中国でリプリントが出て利用が便利になりました。

参考：朱鳳『モリソンの「華英・英華字典」と東西文化交流』(車図開架 823:Sh99)、
宮田和子『英華辞典の総合的研究』(豊図書館 801.3:Mi84)